

老を現役から引きずり降ろしている。数多くの彼の功績の中で特筆すべき点は多くの若者を先進諸国へ留学させる政策を強力に押し進めたことであろう。80年代に入ってから20万人以上と云われる若者が先端技術を習得するだけでなく、西側の競争原理や国際感覚を学び、しかもそれら外国留学経験者のほとんどが中国へ帰って来ている。今のところ彼らは現場の指揮官クラスであっても、近い将来には各界で大きな権限を持つ立場になるに違いない。そうなった日の中国は又大きく変身するだろう。

間もなく鄧小平が死んで丸3年になる。私は鄧小平にだけは長生きして欲しかった。寝たり起きたりの闘病生活が長かったが、1989年の天安門事件はさすがにショックだったようで、その後の衰弱は甚しかったと聞いている。病床では家族が付きっきりで看病し、吐露する言葉は克明に記録され、役所を通さずに家族の手で各方面に直接伝えられている。

台湾には数多くのコングロマリットがあり、その中で気の合ったグループ同志13団体が提携して中国への大規模な投資連合体を形成している。世界の主要な国々にはアドバイザー、エージェント、フィクサー、レップ等々と呼ばれる分子が居り、台湾人の手に負えない部分をサポートする態勢も出来ている。ボランティアではないから儲からないテーマには乗らない。そして社会的利潤の低い業種には手を出さない。集団を形成する理由は「皆で渡れば怖くない」といったリスクを分散する意味もあるが、テーマが巨大なものが多いので、人材や資金量の点でも大きいほうが都合がよい。私はこの集団の日本のレップを勤めて6年になる。そして我々を「先導する」というより「投資をけしかける」のが引退後の鄧小平だった。現役時代の彼は立場上役所を通さずに外国企業、ましてや台湾人と交信する事など出来ない身であったが、引退した後の彼は大胆だった。病床にあっても常に中国の行く末を案じ、アイデアを思いめぐらせて続けていたようだ。我々に続々と繰り出してくる提案は「〇〇省には良質の木材が豊富にとれるから木製品の工場を作ったらどうか」、「XX省は電力が不足している。あそこは金が無いから発電所を建てる金を貸してやってくれ」、「△△市を学園都市にしたらよい。私立の総合大学を建ててくれないか」等々だ。提案が出ると一つ一つ真剣に検討し、各分野の専門家を召集して調査団を編成、現地を徹底的に調査する。この場合役人の話は参考にはするが、あまり信用しない。法的に問題があってもあまり気にしない。市場を調査することを含めて、採算が合うかどうかは五感を働かせ嗅覚で判断する面が強い。元々中国では「地方分権が発達している」、と云えば聞かぬは良いが、北京の中央政府は外交と防衛しかやらない。地方へ交付する予算も無いわけだから、教育も医療も、年金も経済運営、公共事業すら地方へまかせきりだ。法律が発達していないから、役人の裁量で決められるケースが多い。「法治国家でなく、人治国家だ」と云われる所以はここにある。

プロジェクトの遂行に法的な規制がネックとなる場合は法の方を直してもらおう。法の改訂が成らなければ計画は白紙に戻す。役人がタワケたことを主張して計画の遂行に障害となる場合はその役人を配置転換又はクビにしてもらおう。それが出来ないならば計画は御破算にさせてもらおう。役所から便宜をはかるとか優遇措置の提案があっても信用しないし、当てにもしない。元々我々は政府や政治家が経済運営を健全にやって行けるとは思っていない。計画が成功したらその果実はすべて我方で享受し、失敗したら、その自己責任もすべて当方の負担。役所を恨む必要も無いし感謝もしない。そして決断に大敵と云われる「しがらみ」も無い。計画がかたまと当局へ明細を添付した提案書を提出

し、期限付きで回答を迫る。役所の回答が遅れた場合も計画はボツにする。

一見横柄とも思える位中国での台湾人の態度はデカいが、中国側にしても台湾人の大型投資は涙が出る程有難いのだ。たまに私も台湾人といっしょに大陸に出張することがある。中国の国際空港はどこでも混雑しているが、入国審査場で順番待ちの列に長時間並ばされるのがつらい。たいてい一般中国人の窓口と私の通るべき外国人の窓口とは別になっているが、最近では外国人の旅行者が増えたと見え、外国人の入国手続きにも時間が掛かるようになった。ところが台湾人は特別扱いで、ほとんど順番待ちをすることのない外交官専用の窓口の看板が「外交官及び台湾同胞専用通路」に書き換えられ、台湾人は短時間で審査場を突破出来る様になっている。時には台湾人が窓口にししかかると奥からスベアの係員が出てきて、入国カードの記入を手伝ったり税関検査場を通りすぎるまで手荷物を運んでやったりしている光景がみられる。きっと北京から厳しい指図が出ていて、「台湾人ビジネスマンの中国内通行を快適にさせる」ことになっているのだろう。台湾人に見れば、ちっぽけな役人天国の台湾で各種規制をくぐりながらチマチマした商売を捜すよりも、喜んで迎え入れてくれる中国大陆の方がのびのびと大きな仕事の出来る環境にある。それより、今だに郵便物の検閲制度があるような台湾のシステムと中台関係の正常化への改革があまりにも遅いため、理想的な日が来るまで待つていられず、「見切り発車」したと云ったほうが当たっているだろう。

中国には引退後に外国企業の誘致に精を出していた実力者は鄧小平以外にも多数居るようだ。しかし広東省出身の楊尚昆が多くの外国の投資を広東省へ引っぱって来たように、我田引水みたいなものが多い。その点鄧小平は「無私」※だった。彼は四川省の出身だが「四川省でやってくれよ」とは一度も云って来なかった。長老達の若い時分は優秀な人材で、中国をここまで発展させて来た功績は大きい。

しかし13億の人口を有する中国は他の国に前例が無い程巨大である。彼らがいくら焦っても急速に変化させられない点は理解出来、私個人としては彼らに同情的だ。年をとると気が短くなると云われるが、世代交代で引退してみたものの、若い者のやることを隅目八目で見ていたうちにジレックになって来て、隠居の気軽さもあるが、各々が勝手に外国人に働きかけることになったのであろう。こちらの方は「短気発車」といったところであらうか。「見切り発車」と「短気発車」が先行し、中台共政治的改革的のほうがつボトボと後からついて来る構図となっている。

中国ではどんな田舎の安宿に泊まっても必ずテレビが置いてありCNN放送がいつでも見られる。中国に何かあれば即日全世界にニュースが伝えられてしまう。中国もへたな事は出来ない。世界的に経済の悪化が蔓延しようとしている昨今、中国に於ける台湾人の活躍はこれまで以上に重要である。中国が台湾へ武力を行使しても、失うものは多々あるが、得るものはほとんど無い。だから「台湾海峡に戦闘は起こらない」と確信する。鄧小平が亡くなって数日後、我々に宛てた彼の遺言が台北に届き、対策を話合っている会議室で読み上げられた。「沿岸はもういい。もっと内陸に投資を」と「やはり農業が心配だ」の二つだった。我々は彼の遺言を尊重する決議を全会一致で採択した。

中国に対する日本とアメリカの役割は、「農業技術の移転」と「環境対策への支援」であり、台湾海峡の軍事偵察や有事の後方支援態勢を確立などではない。アメリカが世界の警察官を続けたいなら、中台双方へ影響力を行使出来る立場を生かして、双方の問題点を指摘、やさしく反省をうながす「婦人警官」であってほしい。

<完>